

『維摩經玄疏』 訳注 (4)

菅野博史

本訳注は、「『維摩經玄疏』 訳注 (一)」(『大倉山論集』 40、1996. 12、235-261)、「『維摩經玄疏』 訳注 (二)」(『大倉山論集』 45、1999. 3、297-316)、「『維摩經玄疏』 訳注 (三)」(『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』 所収、33-54、山喜房仏書林、2013. 3) の続編である。現在、創価大学大学院の授業で、院生と『維摩經玄疏』 を一緒に読んでいる。参加者は、横溝靖彦、大津健一の二氏である。

参考までに、前回までの『維摩經玄疏』 の科文と今回翻訳した部分の科文を下に示す。今回の部分については、ゴチックで示す。科文において、「項」の下の層については、算用数字を用いる。科文の名称については、テキストの箇所によって若干の異同が見られるので、適宜処理する。科文の名称の後の () に、大正蔵卷第 38 の頁・段を挿入する。なお、2.5123 料簡 (530a12) の後に「今通明乘義有六種不同」(530a21) の段落がある (530c4 まで) が、全体の科文には出ていない。

翻訳部分に、大正蔵卷第 38 の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については、CBETA を利用する。『大日本統蔵經』については、『新纂大日本統蔵經』を使用し、略号を X とする。

『維摩經玄疏』科文

『維摩經玄疏』卷第一

序章——全体の構成 (519a4)

第一部 五重玄義の通釈 (519a10)

第一章 通じて五義の名を標す (519a13)

第二章 次第を辨ず (519a18)

第三章 引証 (519b1)

第四章 総別を明かす (519b13)

第五章 観心に約す (519c7)

第六章 四悉檀に対す (520b3)

第一節 四悉檀を以て五義に対す (520b3)

第二節 略して四悉檀もて観教を起こすの相を釈す (520b12)

第一項 翻釈 (520b17)

第二項 相を辨ず (520b26)

第三項 釈成 (521a13)

第四項 三観を起こす (521b16)

第五項 四教を起こす (521c5)

第六項 経論を起こす (522a1)

第七項 此の経の教を起こす (524a6)

『維摩經玄疏』卷第二

第二部 五重玄義の別釈 (524b3)

第一章 釈名 (524b3)

第一節 別名を釈す (524b4)

第一項 維摩詰を釈す (524b21)

1. 名義を翻釈す (524b25)

1.1 維摩の名を翻ず (524b26)

1. 2 解釈す (524c4)
1. 21 事に就いて解す (524c9)
1. 22 観心に約す (524c20)
2. 三観もて解釈す (524c29)
 2. 1 境智を分別す (525a11)
 2. 2 三観の名を釈す (525b22)
 2. 3 三観の相を辨ず (525c19)
 2. 31 別相三観を明かす (525c24)
 2. 311 従仮入空観 (525c26)
 2. 3111 所観の仮を明かす (525c28)
 2. 3112 観門の不同を明かす (526a20)
 2. 3113 入空観の智を明かす (526b2)
 2. 31131 析仮入空を明かす (526b3)
 2. 311311 見仮を析して空に入る (526b11)
 2. 311312 愛仮を析して空に入る (526c8)
 2. 31132 摩訶衍の体仮入空を明かす (526c13)
 2. 311321 見仮を体して空に入るを明かす (526c16)
 2. 3113211 因成に約して検す (526c20)
 2. 3113212 相続仮に約して検す (527a7)
 2. 3113213 相待仮に約して検す (527a25)
 2. 311322 愛仮を体して空に入るを明かす (527b23)
2. 312 従空入仮観 (527c6)
 2. 3121 入仮の意を明かす (527c8)
 2. 3122 入仮の観を修するを明かす (527c15)
 2. 31221 見仮の一切法に入る (527c17)
 2. 31222 愛仮の一切法に入る (528a9)
 2. 3123 観成じて物を化するを明かす (528a10)
2. 313 中道第一義観 (528a24)

- 2. 3131 所観の境を明かす (528a25)
- 2. 3132 修観の心を明かす (528b2)
- 2. 31321 空三昧を修す (528b10)
- 2. 31322 無相三昧を修す (528b19)
- 2. 31323 無作三昧を修す (528b28)
- 2. 3133 証成を明かす (528c14)
- 2. 32 一心三観を明かす (528c20)
- 2. 321 所観の不思議の境を明かす (528c24)
- 2. 322 能観の三観を明かす (529a11)
- 2. 323 証成を明かす (529a15)
- 2. 4 智眼に対す (529a22)
- 2. 5 諸乗義を成ず (529b7)
- 2. 51 正しく別相三観を明かして三乗を開く (529b10)
- 2. 511 正しく三観に約して三乗を開く (529b11)
- 2. 5111 析法観に約して三蔵教の三乗を開く (529b14)
- 2. 5112 体法観に約して通教の三乗を開く (529b21)
- 2. 5113 総じて析体の別相三観に約して別教の大乘を開く
(529b27)
- 2. 512 十法を具して三乗を成ずるを明かす (529c2)
- 2. 5121 十法の名を出す (529c6)
- 2. 5122 次第に乗を成ずるを明かす (529c11)
- 2. 5123 料簡 (530a12)
- 2. 52 一心三智は但だ是れ一仏乗なり (530b23)
- 2. 521 理即の大乘を明かす (530c8)
- 2. 522 名字即の大乘を明かす (530c10)
- 2. 523 観行即の大乘を明かす (530c12)
- 2. 5231 不思議の正因縁は即ち是れ所観の境なるを知る
(530c13)

- 2. 5232 真正の発心を明かす (530c23)
- 2. 5233 菩薩道を行じて止観を勤修するを明かす
(531a5)
- 2. 5234 諸法を破すこと遍きを明かす (531a10)
- 2. 5235 須らく通塞を知るべきを明かす (531a15)
- 2. 5236 道品調適を明かす (531a17)
- 2. 5237 対治して諸波羅蜜を修するを助く (531a24)
- 2. 5238 善く位次を識る (531a27)
- 2. 5239 安忍成就す (531b5)
- 2. 52310 順道の法愛生ぜず (531b11)
- 2. 524 相似即の大乘を明かす (531b14)
- 2. 525 分証眞実即の大乘を明かす (531b16)
- 2. 526 究竟即の大乘を明かす (531b17)
- 2. 6 断結に約して浄名の義を釈す (531c2)
- 2. 61 不思議の断結を明かす (531c4)
- 2. 62 浄名の義を成ず (531c19)
- 2. 63 法を撰す (531c25)
- 2. 7 此の経の文を通ず (532a2)
- 2. 71 室外を釈す (532a3)
- 2. 72 室内を釈す (532a8)
- 2. 73 出室を釈す (532a20)

[翻訳]

2.311322 愛仮を体して空に入るを明かす

^{527b}二に愛仮を体して空に入るとは、愛仮を分別すること、猶お前に説くが如し。今、明かさく、道を修して三界の愛は皆な夢幻の如しと体す。三仮は即ち空なり。四句もて生を檢せば、並びに不可得なり。是れ三界の愛仮を体し

て以て空に入ると名づく。空は即ち是れ真智増長す。諸法は不生にして般若は生なるは、三界の結を断ずればなり。欲愛の六品¹ 尽くるが若きを、斯陀含と名づく。斯陀含の若しは智、若しは断は、是れ菩薩の無生法忍なり。次に三品の下分の結² を断じ尽くすを、阿那含と名づく。阿那含の若しは智、若しは断は、是れ菩薩^{527c}の無生法忍なり。上二界の愛の五上分結³ を断じ尽くすは、是れ阿羅漢なり。阿羅漢の若しは智、若しは断は、是れ菩薩の無生法忍なり。乃ち辟支仏に至りて、習気を侵除す。若しは智、若しは断は、亦た是れ菩薩の無生法忍なり。此れは皆な巧度にして、不断にして断なり。是れ因縁即空を觀ず。不生生⁴、無生の四諦、入空の觀、其の功は此れに齊^{ひと}し。亦た一切智と名づけ、亦た慧眼と名づくるなり。

2.312 從空入仮觀

二に從空入仮觀を明かすとは、亦た三意と為す。一に入仮の意を明かし、二に入仮の觀を修するを明かし、三に觀成じて物を化するを明かす。

2.3121 入仮の意を明かす

一に入仮の意を明かすとは、此の觀は正しく俗諦を觀じ塵沙・無知を破す

-
- 1 欲愛の六品 欲界の九品の思惑のうち、前の六品の思惑を断じ終わった位が斯陀含（一來果）である。
 - 2 三品の下分の結 斯陀含で断じた欲界の九品の思惑のうち六品に加えて、さらに三品を断じた位（つまり、欲界の思惑をすべて断じ終わった位）が阿那含（不還果）である。
 - 3 五上分結 色界・無色界の上二界に束縛する煩惱のことで、色貪・無色貪・掉挙・慢・無明の五結をいう。また、欲界に束縛する五結を五下分結といい、有身見・戒禁取見・疑・欲貪・瞋恚を指す。
 - 4 不生生 四種不可説（生生不可説・生不生不可説・不生生不可説・不生不生不可説）のなかで、「不生生」は、三番目の別教に相当するものであり、ここに列举される「因縁即空」、「無生の四諦」、「入空の觀」、「一切智」、「慧眼」はいずれも通教の空觀に相当するものなので、奇妙である。ちなみに、『三觀義』も同文である。卷上、「乃至辟支仏侵除習氣、若智若断是菩薩無生法忍。此皆巧度、不断而断。是觀因縁即空、不生生、無生四諦、入空之觀、其功齊此。亦名一切智、亦名慧眼也」(X55, no. 909, p. 672, b5-8) を参照。

と為す。若し二乗は為めに物を化さずば、此の觀を須いず。菩薩は弘く濟うに、必ず此の觀を須う。言う所の從空入仮とは、若し空に滞りて二乗の地に墮せば、『大品經』に云うが如し、「我れは天眼を以て十方世界を觀ずるに、恒沙の菩薩は菩薩道を学べども、菩薩の位に入るを得ること少なく、多く二乗の地に墮す⁵」と。是の故に通教の菩薩は須らく從空入仮し、道種智を用いて菩薩の位に入るべし。若し空に滞らずば、空中に樹を種うるが如く、業病を分別し衆生を化するなり。

2.3122 入仮觀を修するを明かす

二に入仮觀を修するを明かすとは、入仮に二種有り。一には見仮の一切法に入り、二には愛仮の一切法に入る。

2.31221 見仮の一切法に入るを明かす

一に見仮の一切法に入るを明かすとは、菩薩は深き禪定に住し、空は空に非ずと知り、大慈悲を具して、仮を觀ず。見仮⁶に四種有り。此の四見従り無量の見を出だす。一に自生の見、二に他生の見、三に共生の見、四に無因生⁷の見なり。此の四見に各おの執諍の病有るなり。復た次に執に二種有り。

5 『大品經』に云うが如し、「我れは天眼を以て十方世界を觀ずるに、恒沙の菩薩は菩薩道を学べども、菩薩の位に入るを得ること少なく、多く二乗の地に墮す」

『大品般若經』卷第九、大明品、「我以仏眼見東方無量阿僧祇衆生發心行阿耨多羅三藐三菩提行菩薩道、是衆生遠離般若波羅蜜方便力故、若一若二住阿惟越致地、多墮声聞、辟支仏地。南西北方四維上下亦復如是」(T08, no. 223, p. 284, c5-10)を参照。

6 見仮 底本の「見仮仮」を守篤本純『維摩詰經玄疏籤録』(以下、『籤録』と略記する)の指摘によって、「見仮」に改める。

7 種 底本の「重」について、『籤録』には「重疑誤。広本作種為是」とある。「重」も可能であると思うが、「種」に改める。「広本」とは、『三觀義』卷上、「執有二種」(X55, no. 909, p. 672, b21)を指す。

一に外人の邪因縁・無因縁の四生の見に執す。謂う所は、冥初⁸ 従り覺⁹を生じ、微塵¹⁰ 従り生じ、自在天より生じ、時より生じ、自然より生ずるなり。

二に仏法の正因縁の生、自・他・共・無因の四生の見を執す。

自生の見を執すとは、若し意根、意識を生ずと計せば、是れ則ち心能く心を生ず。故に『正法念經』に云わく、「心は工^{たく}みなる画師の如く種種の五陰を作る。一切世間の法は、心従り造らざる¹¹こと無し」と。亦た『唯識論』の明かす所の如きなり¹²。

他生とは、經に言わく、「心は孤^{ひと}り生ぜず。必ず縁を籍^かりて起こるが故なり¹³」と。『大品經』に云わく、「有縁の思は則ち生じ、無縁の思は生ぜず。当に一切の法は皆な外縁従り生ずるを知るべきなり¹⁴」と。

共生とは、言^{528a}有り。『經』に説く所の如し、「六触の因縁もて六受を生じ、一

8 冥初 prakṛti. サーンキヤ学派において、個人存在の開展の過程を説明するために想定された二十五諦の一つ。冥初は冥性、冥諦、世性、自性ともいう。世界を作る根本原質をいう。

9 覺 buddhi. 冥初から展開する根元的な思惟機能をいう。

10 微塵 目で見ることのできる最小のもの。これ以上分割できない最小の物質を極微というが、七つの極微が集まって、一つの微塵となる。

11 『正法念經』に云わく、「心は工みなる画師の如く種種の五陰を作る。一切世間の法は、心従り造らざる¹¹こと無し」 『正法念處經』卷第二十、畜生品、「心能造作一切業 由心故有一切果 如是種種諸心行 能得種種諸果報 心為一切巧画師 能於三界起衆行 為心所使遍諸趣 處處受生無窮已」(T17, no. 721, p. 114, b3-7)、同卷第五、生死品、「又諸彩色、取白作白、取赤作赤、取黄色作黄、若取鵠色則為鵠色、取黒作黒。心業画師、亦復如是。縁白取白、於天人中則成白色。……心業画師取赤彩色、於天人中能作赤色。……心業画師取黄彩色、於畜生道能作黄色。……心業画師取鵠彩色、攀縁觀察、於餓鬼道作垢鵠色。……心業画師取黒彩色、於地獄中画作黒色」(同前, p. 23, c2-15)を参照。『六十卷華嚴經』卷第十、夜摩天宮菩薩說偈品、「心如工画師画種種五陰 一切世界中 無法而不造 如心仏亦爾 如仏衆生然 心仏及衆生 是三無差別」(T09, no. 278, p. 465, c26-29)を参照。

12 『唯識論』の明かす所の如きなり 『大乘唯識論』、「於大乘中立三界唯有識。如經言、仏子三界者唯有心」(T31, no. 1589, p. 70, c24-25)を参照。

13 經に言わく、「心は孤り生ぜず、必ず縁を籍りて起こるが故なり」 出典未詳。

14 『大品經』に云わく、「有縁の思は則ち生じ、無縁の思は生ぜず。当に一切の法は皆な外縁従り生ずるを知るべきなり」 『大品般若經』卷第十七、夢行品、「舍利弗言、無縁業不生、無縁思不生。有縁業生、有縁思生」(T08, no. 223, p. 347, a13-15)を参照。

切の法を得るなり」¹⁵と。

自然とは、『龍王經』に云うが如し、「一切は皆な自然にして生ず」¹⁶と。『大品經』に云わく、「十二因縁は仏・天・人・修羅の作に非ず。性自ら爾るなり」¹⁷と。

仏に四種の説有り。皆な是れ悉檀の方便にして仮に入りて物を利せども、諸もろの衆生は顛倒して了せず。或いは外人の邪説の四辺に執し、或いは仏法の經論の四辺に執して、見著を生ず。故に『智度論』に云わく、「般若は、譬えば大火炎の如く、四辺取る可からず」¹⁸と。邪見の火に焼かる。

今、明かさく、執する所の見に随えば、即ち苦・集なり。若し能く苦を知り集を断ぜば、必ず須らく道を修し滅を証すべし。皆な是れ仮名にして幻化の如くにして知る。

2.31222 愛仮の一切法に入るを明かす

次に愛仮の一切法に入るを明かすは、知る可きなり。

2.3123 観成じ物を化するを明かす

三に観成じ物を化するを明かすとは、菩薩は空従り仮に入りて修証す。即

15 『經』に説く所の如し、「六触の因縁もて六受を生じ、一切の法を得るなり」

『大品般若經』卷第七、十無品、「六入、六識、六触、六触因縁生受亦如是」(同前、p. 268, c5-6)を参照。

16 『龍王經』に云うが如し、「一切は皆な自然にして生ず」 『海龍王經』卷第一、六度品、「人不離法、法不離人。如人自然、吾我自然。吾我自然、諸法自然。諸法自然、仏法自然。其以如是求諸仏法、如自然者解自然已、便違仏法。其有求者、若已求者、甬当求者、彼求此已求無所得、是為菩薩建立智慧精進之行」(T15, no. 598, p. 135, c22-27)を参照。

17 『大品經』に云わく、「十二因縁は仏・天・人・修羅の作に非ず。性自ら爾るなり」 『大智度論』卷第二、「如一道人間仏言、大徳。十二因縁仏作耶。他作耶。仏言、我不作十二因縁、余人亦不作。有仏無仏、生因縁老死、是法常定住」(T25, no. 1509, p. 75, a9-12)を参照。

18 『智度論』に云わく、「般若は、譬えば大火の炎の如く、四辺取る可からず」 『大智度論』卷第十八、「般若波羅蜜 譬如大火焰 四辺不可取 無取亦不取」(同前、p. 190, c23-24)を参照。

ち是れ因縁の仮を觀ず。生不生¹⁹、無量の四諦と名づけ、亦た道種智と名づけ、亦た法眼と名づく。二乗の地を過ぎ、道種智を用て、菩薩の位に入り、仮に入りて修証す。道種智に三種有り。一に生滅の道種、二に無生の道種、三に藏識に依る道種なり。菩薩は是の位に住し、天魔、及び其の眷屬を降伏せんが為めに、即ち愛仮に入り諸もろの神通を現じ、乃至、事を同じくし物を利し、諸もろの愛論²⁰を説く。此の土の三墳五典²¹、国を安んじ民を育むの經書の如きなり。外道、及び其の眷屬を降伏せんが為めに、即ち見仮に入り、智慧を顯示し、乃至、事を同じくし物を利し、諸もろの見論²²を説く。十八種²³・六師は、皆な一切智と称するが如きなり。深く愛見の苦集の病は無量なりと知る。道滅の薬も亦復た無量にして、皆な無量の夢幻の如く、四悉檀を用て其の根縁に赴き、病に隨いて薬を設く。復た次に菩薩は是の如き無量の衆生を度せんが為めなるが故に、神通に遊戲し、仏国土を浄め、衆生を成就し、仮に入り無量の願行を修す。是れ觀成じて物を化すと為すなり。

19 生不生 前注4を参照。

20 愛論 『中論』卷第三、觀法品、「戲論有二種。一者愛論、二者見論」(T30, no. 1564, p. 25, b9-10)を参照。

21 三墳五典 中国古代の權威ある書。『尚書』序によれば、伏羲・神農・黃帝の書を三墳といい、少昊・顓頊・高辛・唐・虞の書を五典という。

22 十八種 『百論疏』卷第一、「四韋陀者、外道十八大經。亦云十八明処。四皮陀為四。復有六論。合四皮陀為十。復有八論。足為十八。四皮陀者、一荷力皮陀明解脫法。二治受皮陀明善道法。三三摩皮陀明欲塵法。謂一切婚嫁欲樂之事。四阿闍皮陀明呪術算數等法。本云皮陀、此間語訛、故云韋陀。六論者、一式又論、積六十四能法。二毘伽羅論、積諸音声法。三柯刺波論、積諸天仙上古以來因縁名字。四豎底(張理反)沙論、積天文地理算數等法。五闍陀論、積作首盧迦法。仏弟子五通仙第説偈、名首盧迦(強河反)。六尼鹿多論、積立一切物名因縁。復有八論。一肩亡婆論、簡摺諸法是非。二那那毘薩多論、明諸法道理。三伊底呵婆論、明伝記宿世事。四僧佉論、解二十五諦。五課伽論、明撰心法。此兩論同釈解脫法。六陀菟論、積用兵法。七樞闍婆論、積音樂法。八阿輪論、積医方」(T42, no. 1827, p. 251, a20-b8)を参照。

23 六師 釈尊と同時代の六人の有名な自由思想家。仏典では「六師外道」と出る。プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバラ、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ・ベラッティブッタ、ニガンタ・ナータブッタの六人。

2.313 中道第一義觀

三に中道第一義觀を明かすとは、即ち三意と為す。一に所觀の境を明かし、二に修觀の心を明かし、三に証成を明かす。

2.3131 所觀の境を明かす

一に所觀の境を明かすとは、前の二觀は是れ方便なり。二諦を照らすの智有りとも、未だ無明を破せず、中道を見ず。真俗別に照らすは、即ち是れ智障なり。故に『撰大乘論』に云わく、「智障は甚だ盲闇にして、真俗分別すと謂う²⁴」と。智障とは、阿黎耶識に依る。識は、即ち是れ無明住地なり。無明住地は、即ち是れ生死の根本なり。故に、此の經に云わく、「無住の本従り一切の法を立つ²⁵」と。「無住の本」とは、即ち是れ無始の無明にして、更に別惑の依住する所無きなり。

2.3132 修觀の心を明かす

二に修觀の心を明かすとは、若し此の觀を修せば、還た前の二觀の双忘双照の方便を用うるなり。双忘の方便とは、初めの觀は俗は俗に非ずと知る。即ち是れ俗は空なり。次の觀は、真は真に非ずと知る。即ち是れ真は空なり。俗は俗に非ざるを忘れ、真は真に非ざるを忘る。非真非俗は、即ち是れ中道なり。是の二空觀に因りて、中道第一義諦に入る。中道を觀ずとも見ざるは、皆な是れ無明の障うる所なり。当に実相を觀じて三三昧²⁶を修すべし。『大智度論』に云わく、「声聞經の中には、三三昧は四諦十六行を縁ずと説き、

24 『撰大乘論』に云わく、「智障は甚だ盲闇にして、真俗分別すと謂う」 『撰大乘論積』卷第一、釈依止勝相品、「智障極盲闇 謂真俗別執」(T31, no. 1595, p. 153, c7)を参照。

25 此の經に云わく、「無住の本従り一切の法を立つ」 『維摩經』卷中、觀衆生品、「又問、顛倒想孰為本。答曰、無住為本。又問、無住孰為本。答曰、無住則無本。文殊師利、從無住本、立一切法」(T14, no. 475, p. 547, c20-22)を参照。

26 三三昧 空三昧・無相三昧・無作三昧を指す。

摩訶衍には三三昧は但だ諸法実相を縁ずるのみと明かす²⁷と。

2.31321 空三昧を修す

今、初めに空三昧を修す。此の無明を観ずるに、自ら生ぜざるは、法性従り生ぜざるなり。他より生ぜざるは、法性を離るる外に別に他に依るの無明生ずること有るに非ず。共に生ぜざるは、亦た法性は無明に共じて生ずるに非ず。因縁無くして生ずるに非ざるは、法性を離れ無明を離れて生ずること有るに非ざるなり。若し四句もて檢せば、無明は本自^も生ぜず。生の源の不可得なるは、即ち是れ無始の空なり。是れ空三昧と名づく。空無住の本より、一切法を立つるなり²⁸。若し爾らば、豈に全く地論師の真如法性は一切法を生ずと計するに同じからん。豈に全く撰大乘師の黎耶識は一切法を生ずと計するに同じからんや。

問うて曰う。各おの計するに、何の失あるや。

答えて曰う。理に二無し。是れ二の大乘論師は俱に天親を稟く。何ぞ諍うこと水火に同じきことを得ん。

2.31322 無相三昧を修す

次に無相三昧を観ずとは、即ち無生の実相は有相に非ずと観ず。闇室の瓶盆の相有るが如からざるなり。無相に非ざるは、乳の内に酪性無きが如きに非ざるなり。亦有亦無相に非ざるは、智者の空、及び不空を見るが如からず。

27 『大智度論』に云わく、「声聞経の中には、三三昧は四諦十六行を縁ずと説き、摩訶衍には三三昧は但だ諸法実相を縁ずるのみと明かす」 引用の後半部分については、『大智度論』卷第二十、「摩訶衍義中、是三解脱門、縁諸法実相。以是三解脱門、觀世間即是涅槃」(T25, no. 1509, p. 207, c17-19)を参照。

28 空無住の本より、一切法を立つるなり 底本の「空無住本一切法也」を『維摩経』と『三觀義』によって、「空無住本立一切法也」と改める。前注25を参照。『三觀義』卷上、「空無住之本、立一切法也」(X55, no. 909, p. 673, a18-19)を参照。

非有に非ず、非無相に非ず、取著せば即ち是れ愚癡論²⁹なり。若し四辺の定相を取らずば、即ち是れ無相三昧もて実相に入るなり。若し爾らば、豈に全く地論師の、本と仏性有ること闇室の瓶盆の如きを用うるに同じからん。亦た全く三論師の、乳の中の酪性を破し、畢竟尽く浄にして、所有の性無きに同じからざるなり。

問うて曰う。各おの計するに、何の失あるや。

答えて曰う。若し失無くば、二の大乗論師、何ぞ諍うこと水火に同じきことを得んや。

2.31323 無作三昧を修す

次に無作三昧を修するを明かす。真如实相を觀ずるに、縁修³⁰もて作仏するを見ず、亦た真修もて作仏するを見ず、亦た真・縁^{528c}の二修合するが故に作仏するを見ず、亦た真・縁の二修を離れて作仏せざるなり。四句もて修を明かすは、即ち是れ四種もて義を作す。若し四修無くば、即ち四作³¹無し。是れ無作三昧なり。若し爾らば、豈に相州³²北道の義を明かして縁修もて作仏し、南土の大小乗師も亦た多く縁修もて作仏するを用うることに同じからんや。亦た相州南道の義を明かして真修もて作仏するを用うるに同じからず。

問うて曰う。偏えに用うるに、何の過あるや。

答えて曰う。正道は諍うこと無し。何ぞ諍うこと水火に同じきことを得ん。今明かさく、三三昧を用て一実諦を修す。無明を開き法性を顕わす。真・縁を忘れ、諍論を離れ、言語の法滅し、無量の罪除く。清浄の心は一にして、

29 愚癡論 『大智度論』卷第十五、「云何生。生名因縁相合、無常、不自在、属因縁。有老病死相、欺誑相、破壊相、是名生。生則是有為法。如対治悉檀説。常、無常、非実相、二俱過故。若諸法非有常、非無常、是為愚癡論。所以者何、若非有則破無、若非無則破有。若破此二事、更有何法可説」(T25, no. 1509, p. 170, c12-17)を参照。

30 縁修 「縁修」は、真如を縁ずる(対象とするの意)有心有作=作爲的な修行、「真修」はことさらに修行しようという意志を起こさずに無心無作で行なう修行をいう。

31 作 底本の「依」を、『再校維摩經玄義』の本文には「作」に作る。これに従う。なお、『三觀義』、「即無四作」(X55, no. 909, p. 673, b9)を参照。

32 州 底本の「列」を、『再校維摩經玄義』の本文には「州」に作る。これに従う。

水若し澄清せば、仏性の宝珠³³は、自然に現ずるなり。仏性を見るが故に、即ち大涅槃に住することを得。

問うて曰う。若し爾らば、今云何んが説くや。

答えて曰う。『大涅槃經』に云わく、「不生不生を、大涅槃と名づく。道を修して得るを以ての故に、故に不可説なり」と。豈に諸もろの大乗の論師、偏執して定んで説くが如からんや。今、「因縁を以ての故に、亦た説くことを得可し³⁵」とは、若し四悉檀の意を解すること前に異説するが如くば、皆な大いに衆生を利益し、仏法を興顯するなり。

2.3133 証成を明かす

三に証成を明かすとは、若し無明の因縁を觀ぜば、不二法門に入り、不思議解脱に住するなり。故に、此の經に不二法門に入るを明かす。即ち是れ中道に入り³⁶、双べて二諦を照らし、自然に薩婆若海に流入す。此れは是れ因縁は即ち一実諦の不生不生なりと觀じ、無作の四実諦を証す。亦た一切種智と名づけ、亦た仏眼と名づく。即ち是れ初地に入り、仏性を見、大涅槃に住するなり。

33 珠 『再校維摩經玄義』の頭注に「殊宋作珠」とあり、これにしたがひ、底本の「殊」を「珠」に改める。

34 『大涅槃經』に云わく、「不生不生を、大涅槃と名づく。道を修して得るを以ての故なり」 『大般涅槃經』卷第十九、光明遍照高貴徳王菩薩品、「仏言、善哉善哉。善男子、不生不生不可説、生生不可説、生不生不可説、不生不生亦不可説、生亦不可説、不生亦不可説。有因縁故、亦可得説。云何不生不生不可説。不生名為生。云何可説。何以故。以其生故。云何生生不可説。生生故生、生故不生、亦不可説。云何生不生不可説。生即名為生、生不自生、故不可説。云何不生不生不可説。不生者、名為涅槃。涅槃不生、故不可説。何以故。以修道得故」(T12, no. 375, p. 733, c9-18)を参照。

35 「因縁を以ての故に、亦た説くことを得可し」 『大般涅槃經』卷第十九、光明遍照高貴徳王菩薩品、「有因縁故、亦可得説」(同前, p. 733, c11-12)を参照。

36 中道に入り 底本の「中道」を『再校維摩經玄義』の頭注に「是下宋有入字」とあり、これにしたがひ、底本の「中道」を「入中道」に改める。

2.32 一心三觀を明かす

第二に一心三觀を辨ずとは、正しく是れ円教の利根の菩薩の修習する所なり。所以は何ん。不思議の心の因縁の理は、甚だ深く微妙なり。其の觀慧の門は、難解難入なり。今、此の一心三觀を明かすに、亦た三意と為す。一に所觀の不思議の境を明かし、二に能觀の三觀を明かし、三に証成を明かす。

2.321 所觀の不思議の境を明かす

一に不思議の觀境を明かすとは、即ち是れ一念の無明心の因縁もて生ずる所の十法界、以て境と為すなり。

問うて曰う。一人に十法界を具す。次第に無量劫を経。云何人が止だ一念の無明心の内に在りて妨闕無からんや。

答えて曰う。此の經に不思議を明かす。須弥、芥子に入るも、相い妨闕せず。無情の物すら尚お此くの如きを得。心神は微妙にして、一念に一切の三世の諸心・諸法^{529a}を具す。何ぞ疑いを致すに足らん。譬えば眠法、心を覆い、一念の内に、夢に一切の諸心・諸事を見るが如し。若し正しく眠りて夢みるの時、無量劫を経たりと謂う。『法華經』に説くが如し、「夢に初發心より乃ち成仏に至るまでの無量の諸事を見る」と。其の覚むる時に比びて、³⁷反りて^{およ}祇だ^{かえ}是れ一念の眠心なるのみと觀ずるなり。心は自性清淨心を譬え、眠法、心を覆うは無明を譬う。無量の夢の事は、恒沙無知、一切の恒沙の仏法を覆うを譬え、夢の事の不実の善惡憂喜は、見思惑、真空を覆うを譬うるなり。若しく^{くわ}細しく尋ねずば、夢は不思議の疑いを譬え、終に決するの理無し。故に諸もろの大乗經は多く十喩を説く。但だ諸法師は円かには譬えの意を取らず、止だ偏えに虚偽空の辺を得るのみにして、無量の無明・法性を譬うるの辺を見ざるなり。故に三諦の境の義は成ぜざるなり。

37 『法華經』に説くが如し、「夢に初發心より乃ち成仏に至るまでの無量の諸事を見る」 『法華經』安樂行品、「若於夢中 但見妙事……後当入涅槃 如烟尽灯滅」(T09, no. 262, p. 39, b20-c15) を参照。

2.322 能觀の三觀を明かす

二に能觀を明かすとは、若し此の一念無明の心を觀ぜば、空に非ず仮に非ず。一切諸法も亦た空・仮に非ず。而して能く心の空・仮を知らば、即ち一切法の空・仮を照らす。是れ則ち一心三觀もて円かに三諦の理を照らす。癡愛を断ぜずして、諸もろの明脱を起こす³⁸。若し水澄清せば、珠の相は自ら現ず。此れは即ち觀行即なり。

2.323 証成を明かす

三に証成を明かすとは、若し一心三觀を証せば、即ち是れ一心三智、五眼なり。若し六根清浄を得ば、相似の証と名づく。即ち十信の位なり。若し真無漏を發せば、分証真實即と名づく。即ち是れ初住なり。此の經に云わく、「一念に一切法を知るは、即ち是れ道場に坐して、一切智を成就するが故なり³⁹」と。『大品經』に云わく、「菩薩有りて、初發心従り即ち道場に坐す⁴⁰」と。当に知るべし、是の菩薩は仏の如しと為すなり。『智度論』に云わく、「三智は、其の實、一心の中に得。仏は分別して人の為めに説き、解し易からしめんと欲するが故に、故に次第に説くのみ⁴¹」と。

38 『法華經』に説くが如し、「夢に初發心より乃ち成仏に至るまでの無量の諸事を見る」『法華經』安樂行品、「若於夢中 但見妙事……後當入涅槃 如烟尽灯滅」(T09, no. 262, p. 39, b20-c15)を参照。

39 此の經に云わく、「一念に一切法を知るは、即ち是れ道場に坐して、一切智を成就するが故なり」『維摩經』卷上、菩薩品、「一念知一切法是道場、成就一切智故」(同前, p. 543, a4-5)を参照。

40 『大品經』に云わく、「菩薩有りて、初發心従り即ち道場に坐す」『大品般若經』卷第一、習応品、「仏告舍利弗、菩薩摩訶薩從初發意行六波羅蜜、乃至坐道場、於其中間常為諸声聞、辟支仏作福田」(T08, no. 223, p. 222, b19-22)を参照。

41 『智度論』に云わく、「三智は、其の實、一心の中に得。仏は分別して人の為めに説き、解し易からしめんと欲するが故に、故に次第に説くのみ」『大智度論』卷第二十七、「問曰、一心中得一切智、一切種智、断一切煩惱習。今云何言以一切智具足得一切種智、以一切種智断煩惱習。答曰、實一切一時得。此中為令人信般若波羅蜜故、次第差品説。欲令衆生得清浄心、故如是説」(T25, no. 1509, p. 260, b17-22)を参照。なお、『摩訶止観』卷第三上、「仏智照空如二乗所見、名一切智。仏智照仮如菩薩所見、名道種智。仏智照空仮中皆見実相、名一切種智。故言、三智一心中得。故知一心三止所成三眼見不思議三諦」(T46, no. 1911, p. 26, b10-14)を参照。

2.4 智眼に対す

第四に智眼に対すとは、智は即ち三智、眼は即ち五眼なり。三観もて能く因縁の三諦の理を知るは、即ち是れ三智なり。能く因縁の三諦の理を見るは、即ち是れ五眼なり。若し三観を解せば、三智・五眼の両科の大義は、宛然として明了なり。若し分別して論を為さば、三観を因と為し、三智・五眼を果と為す。通じて語を為さば、三観は即ち是れ三智・五眼の異名なるのみ。『大智論』に般若を釈して云うが如し、「別して則ち般若を因と為す。仏心に至れば、則ち名を一切種智に変ず⁴²」と。若し通じて論を為さば、俱に因果に通ず。『大智論』の偈に云うが如し、「若し如法に観ぜば、仏と般若と涅槃の是の三は則ち一相なり。其の実は、異なること有ること無し⁴³」と。故に知んぬ、般若の名も亦た仏果に至る⁴⁴。又た、如し三徳は大涅槃を成ぜば、不縦不横なること世の伊字の如し⁴⁵。摩訶般若は果上の一徳なり。

問うて曰う。三観は三智に対すれば、其の数は相応す。三観は五眼に対すれば、数は豈に相当せん。

答えて曰う。若し麁細の因縁を観ぜば、即ち是れ肉眼・天眼の境なり。若し三諦の理を見ば、即ち是れ慧眼・法眼・仏眼なり。

42 『大智論』に般若を釈して云うが如し、「別して則ち般若を因と為す。仏心に至れば、則ち名を一切種智に変ず」 『大智度論』 卷第十八、「仏所得智慧は実波羅蜜。因是波羅蜜故、菩薩所行亦名波羅蜜。因中説果故。是般若波羅蜜、在仏心中変名為一切種智。菩薩行智慧、求度彼岸、故名波羅蜜。仏已度彼岸、故名一切種智」(T25, no. 1509, p. 190, a20-24) を参照。

43 『大智論』の偈に云うが如し、「若し如法に観ぜば、仏と般若と涅槃とは、是れ三にして則ち一相なり。其の実は、異なること有ること無し」 『大智度論』 卷第十八、「如法観仏 般若及涅槃 是三則一相 其实無有異」(同前, p. 190, b26-28) を参照。

44 又 底本の「文」を、『再校維摩經玄義』の本文は「又」に作る。これに従う。

45 三徳は、大涅槃を成じ、不縦不横なること世の伊字の如し 『南本涅槃經』 卷第二、哀歎品、「我今当令一切衆生、及我諸子四部之衆、悉皆安住秘密藏中。我亦復当安住是中、入於涅槃。何等名為秘密之藏。猶如伊字三点、若並則不成伊、縦亦不成。如摩醯首羅面上三目、乃得成伊。三点若別、亦不得成。我亦如是。解脫之法亦非涅槃。如來之身亦非涅槃。摩訶般若亦非涅槃。三法各異、亦非涅槃。我今安住如是三法、為衆生故名入涅槃、如世伊字。」(T12, no. 375, p. 616, b8-17) を参照。

2.5 諸乘義を成ず

第五に諸もろの乗の義を成ずとは、三観は即ち是れ三智なり。三智に二種有り。一に別相の三智、二に一心の三智なり。一に別相の三智は、即ち三乗を開く。二に一心の三智は、但だ是れ一仏乗なるのみ。

2.51 正しく別相三観を明かして三乗を開く

第一に正しく別相の三観もて三乗を開くを明かすとは、即ち二意と為す。一に正しく三観に約して三乗を開き、二に十法もて三乗を成ずるを明かす。

2.511 正しく三観に約して三乗を開く

一に正しく三観に約して三乗を開くとは、即ち三意と為す。一に⁴⁶析法観に約して三蔵教の三乗を開き、二に体法観に約して通教の三乗を開き、三に総じて析・体・別相の三観に約して、別教の大乘を成ず。

2.5111 析法観に約して三蔵教の三乗を開く

一に析法観もて三蔵教の三乗を開く義を明かすとは、三蔵教は、三乗の行人、同じく因縁仮を析して以て空に入るを明かす。若し声聞は総相もて法を析して空に入り、真無漏を發し、一切智を成ぜば、声聞乗と名づく。若し辟支仏は別相もて法を析して空に入り、真無漏を發し、一切智を成ぜば、辟支仏乗と名づく。若し菩薩は総相・別相もて法を析して空に入り、結を断じて証を取ることをせず、多く俗仮に入り、六度を修行し、一切智、仏智、自然智、無師智⁴⁷を求めば、即ち是れ三蔵教の大乘なり。

46 析 『維摩經玄疏』卷第二の「如声聞經所明折仮入生法二空者」(T38, no. 1777, p. 526, a21-22)の「折」について、『再校維摩經玄義』の頭注には、「折宋作析。分析之析。下皆同」とある。これに従う。ここも底本には「折」に作るが、「析」に改める。以下、同じ。

47 一切智、仏智、自然智、無師智 『法華經』譬喻品、「若有衆生、從仏世尊聞法信受、勤修精進、求一切智、仏智、自然智、無師智、如來知見、力、無所畏、愍念、安樂無量衆生、利益天人、度脱一切、是名大乘、菩薩求此乘故、名為摩訶薩、如彼諸子為求牛車、出於火宅」(T09, no. 262, p. 13, b24-29)を参照。

2.5112 体法観に約して通教の三乗を開く

二に体法観もて通教の三乗を開くを明かすとは、三乗の人は同じく因縁仮を体して以て空に入る。若し真無漏を発し、見思惑を断じ、小乗の根鈍なるものは、但だ正使のみを除き、一切智を成ぜば、声聞乗と名づく。縁覚の中根は、習気を侵除し、一切智を成ぜば、辟支仏乗と名づく。菩薩は一切智を得て仮に入り、道種智を修し、衆生を教化し、一切種智を求めば、即ち是れ通教の大乗なり。

2.5113 総じて析体の別相三観に約して別教の大乗を開く

三に総じて析・体・別相三観に約して別教の大乗を成ずるを明かすとは、若し別教の菩薩は、因縁を観じて、別相三観を修せば、次第に一切智・道種智を成じ、乃ち中道観を修して、仏性を見、^{529c}一切種智を成じ、常住の涅槃を求むるに至る。即ち是れ別教大乗の義なり。

2.512 十法を具して三乗を成ずるを明かす

二に十法を具し三乗を成ずるを明かすとは、三観は乃ち是れ乗の正体なり。若し十法和合に約せざれば、則ち乗の義は成ぜず。所以は何ん。三乗は悉く能く運びて三界の火宅より出ず。必ず須らく正助の衆善和合すべし。故に運用の義は成ずるなり。

此れに就いて、即ち三意と為す。一に十法の名を出し、二に次第に乗を成ずるを明かし、三に料簡す。

2.5121 十法の名を出す

一に十法の名を出すとは、一に正因縁もて法を生ずるを識るを明かし、二に真正に発心し、三に止観修習し、四に諸法を破すこと遍く、五に善く通塞を知り、六に道品調適し、七に対治して三解脱門を助開し、八に次位を識るを明かし、九に強・軟の両賊を安忍し、十に順道法愛生ぜず。三乗の人は、三観を修学す。若し此の十法を具せば、即ち三乗を成じて、涅槃に入るなり。

2.5122 次第に乗を成ずるを明かす

次に次第に乗を成ずるを明かすとは、初めに須らく正因縁もて諸法を生ずるを知るべき所以は、無明の因縁もて一切法を生ずるを知るは、即ち是れ正因縁にして、外に邪因縁・無因縁もて一切法を生ずるを執するに異なるなり。

次に真正に発心するを明かすとは、三乗の行人は明らかに正因縁もて生ずる所の三界火宅を知り、生死を覚悟し、涅槃を志求す。但だ菩薩の大悲もて物を済うの心は異なるなり。

次に止観修習するを明かすとは、発心、信解すること分明ならば、必ず須らく定慧を修行すべし。即ち是れ三乗の行人の根本なり。

次に諸法を破すこと遍きを明かすとは、若し見・思の両輪の執する所の妄境を破せず、妄境を破すること遍からざれば⁴⁸、則ち止観に滞ること有るなり。

次に須らく通塞を知るべきを明かすとは、破する所の法の浅き従り深きに至るに随い、皆な道・滅の通、苦・集の塞有り。若し此の理に迷わば、即ち得失、是れ字なるや字に非ざるやを知らず⁴⁹、去取、宜しきを失うなり。

次に道品調適を明かすとは、三十七品は是れ三乗の道に入るの正要にして、能く衆行を引進し、三脱門に到り、涅槃に入るなり。

次に対治して三解脱門を開くを助くることを明かすとは、即ち是れ四禪・

48 妄境を破すること遍からざれば 底本の「不遍」を文意と『三観義』によって「破妄境不遍」に改める。『三観義』巻下、「若不破見思兩輪所執妄想。破妄想不遍、則止観有滞也」(X55, no. 909, p. 675, c21-22)を参照。なお、引用文のなかの「想」については、「想略玄作境。次同。古無破字」とある。

49 是れ字なるや字に非ざるやを知らず 『南本涅槃經』巻第二、哀歎品、「是時客復語王言、王今不応作如是語。如虫食木有成字者。此虫不知是字非字。智人見之、終不唱言是虫解字、亦不驚怪。大王。当知。旧医亦爾。不別諸病、悉与乳藥。如彼虫道偶得成字」(T12, no. 375, p. 618, b1-6)を参照。

四無量心・四無色定・九想⁵⁰・八念⁵¹・十想⁵²・八背捨⁵³・八勝處⁵⁴・十一切處⁵⁵・九次第定⁵⁶・事中の六度等、諸もろの対治の法もて、三脱門を開くを助くるなり。

次に次位を識るを明かすとは、三乗、道に入るに、乾慧地従り乃ち仏地に至るまで⁵⁷、若し能く分別して謬らずば、即ち叨濫を生ぜず、増上慢の心を破するなり。

次に強^{530a}・軟の両賊を安忍するを明かすとは、未だ外凡の位に入らず、内外の八風⁵⁸もて三乗の行人の出世の善根を壊す。若し能く安忍すれば、則ち壊する所と為らず、乾慧地に入り、因りて暖⁵⁹・頂を發し、性地に入るなり。

次に順道法愛生ぜざるを明かすとは、三乗の人は若し性地に入らば、善有

50 九想 身体の醜悪な九種の相を觀じて、身体に対する執着を離れる不淨觀。脹想・壞想・血塗想・膿爛想・青瘀想・噉想・散想・骨想・燒想。

51 八念 『大智度論』卷第二十一、「念仏、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念入出息、念死」(T25, no. 1509, p. 218, c21-22)を参照。

52 十想 『大智度論』卷第二十三、「無常想、苦想、無我想、食不淨想、一切世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離欲想、尽想」(同前, p. 229, a7-8)を参照。

53 八背捨 八解脱ともいう。「背捨」は、貪著の心に背き捨てること。『次第禪門』卷第十(T46, no. 1916, p. 540, c20-25)によれば、内有色相(=想)外觀色背捨・内無色相外觀色背捨・淨背捨身作証・虛空處背捨・識處背捨・不用處背捨・非有想非無想背捨・滅受想背捨。第一・第二は初禪・二禪により、第三は四禪により、第四から第七までは四無色定による。第八は滅尽定に入ること。

54 八勝處 勝知勝見を生ずる依り所なので、勝處という。欲界の色處を觀じて、貪心を除く禪觀。『次第禪門』卷第十(同前, p. 543, c10-16)によれば、八背捨の第一・第二をそれぞれ二分して、内有色相(=想)外觀色少勝處・内有色相外觀色多勝處・内無色相外觀色少勝處・内無色相外觀色多勝處の四つの勝處があり、さらに、八背捨の第三を四分して、青勝處・黃勝處・赤勝處・白勝處の四つがある。

55 十一切處 万物を一つの対象に総合して觀察する十種の禪觀。『次第禪門』卷第十(同前, p. 545, a13-19)を参照)によれば、十の対象は、青・黃・赤・白・地・水・火・風・空・識。

56 九次第定 四禪・四空定(四無色定)・滅受想定(滅尽定)のこと。

57 乾慧地従り乃ち仏地に至るまで 通教の三乗共の十地の名称は、乾慧地・性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已辦地・支仏地・菩薩地・仏地。

58 八風 利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂のこと。これらは風のように人の心を動揺させるとされる。たとえば、『法華文句記』卷第一下、「利衰毀譽稱譏苦樂」(T34, no. 1719, p. 168, b19-20)を参照。

59 暖 煖に通じる。四善根(煖・頂・忍・世第一法)の第一。

漏の五陰の有する所の善法・功德・智慧の順道を発す。若し法愛を生ぜば、即便ち頂墮し、進んで忍法に入り世第一法を成じ真無漏を發するを得ざるなり。若し能く法愛を生ぜずば、即ち頂墮せず、忍法位に入り、世第一法を成じ、真無漏を發するを得。即ち是れ三乗の人は、同じく第一義諦を見、界内の見思の煩惱を断じ、三界の火宅を出ず。是れ此の乗、三界従り出でて、有余涅槃に到り、尽智・無生智⁶⁰に住し、運びて無余涅槃に入ると為す。故に十法を以て三乗を成ずるは、其の義顕らかなり。

2.5123 料簡

三に料簡を明かすとは、問うて曰う。自ら衆生、仏に値い、一法を聞くに随いて、即ち道を得ること有り。或いは一法門を修するに随いて、即ち道に入る。『法華經』の三界火宅の諸子、門外に方に車を索む。何ぞ畢悉く此の法を具して、乃ち乗を成ぜんや。

答えて曰う。皆な往昔、已に此の十法を修するを以て、根性を成ずるなり。

問うて曰う。三車は門外なり。今何ぞ十法もて乗を成じ、界内従り出づるを得ん⁶¹。

答えて曰う。『法華』は的しく尽・無生に拠る。三乗の有為無漏の功德は、是れ究竟の三乗能く運びて無余涅槃に入る。乃ち是れ真の乗に既に無余涅槃の入る可きもの無し。又た、運びて常住涅槃に至ること能わざれば、則ち三

60 尽智・無生智 「尽智」は、三界内のすべての煩惱を断ち切り、四諦について、苦をすでに知り、集をすでに断じ、滅をすでに証し、道をすでに修したと知る智を言う。「無生智」は、利根の阿羅漢だけが得る智で、苦をすでに知ったから、もはや知る必要がなく、集をすでに断じたから、もはや断じる必要がなく、滅をすでに証したから、もはや証する必要がなく、道をすでに修したから、もはや修する必要がないと知る智である。

61 或いは一法門を修するに随いて……界内従り出づるを得ん この「或随修一法門、即入道。法華經三界火宅諸子、門外方索車。何畢悉具此法乃成乘也。答曰、皆以往昔已修此十法、成根性也。問曰、三車門外。今何得十法成乘從界内而出」には、錯簡があるようで、『三觀義』卷下には、「或有隨修一法門、即入道。何必悉具此十法成乘也。答曰、皆以往昔修引十法、成根性也。問曰、法華經出三界火宅、諸子門外方索三車。今何得十法成乘從界内而出」(X55, no. 909, p. 676, a17-20) とある。

乗の義は成ぜず。故に三車を索むれども、得ざるなり。

今、通じて乗の義に六種の不同有るを明かす。一に理乗、二に教乗、三に行乗、四に相似乗、五に分証真實乗、六に究竟乗なり。

一に理乗とは、三乗の行人に悉く四諦・十二因縁・六度の理有りて、三乗の根性は同じからざるなり。

二に教乗とは、即ち是れ仏は三乗の教を開く。三乗の諸子は、仏の教門を以て、三界の苦を出ず。亦た名字乗とも名づくるなり。

三に観行乗とは、即ち是れ三乗の人、五停心観⁶²、別相・総相の念処を修するは、乾慧地の観行なり。故に『勝鬘經』に云わく、「三乗の初業は法に愚ならず⁶³と。意、此に在るなり。

四に相似乗とは、即ち是れ四善根人の得る所の善有漏^{530b}の五陰なり。

五に分証真實乗とは、即ち是れ学智にして、苦忍、真明の無漏を發する従り、乃ち非想第九の無閻の金剛三昧⁶⁴に至るなり。

六に究竟乗とは、即ち是れ無学智にして、阿羅漢・辟支仏・仏の得る所の非想の第九解脱道、尽智、無生智、仏の如実智⁶⁵、能く運びて無余涅槃に入るなり。此れは即ち是れ三蔵教の析法観なり。通教の体法観の十法もて乗を成ずるの意は此に在るなり。但だ別教の三観の十法もて乗を成ずるに、六種の乗を明かす。義意同じからず。事を分別すること繁し。

問うて曰う。仏法は無量なり。何が故に的にしく此の十法を取りて三乗を成

62 五停心観 不淨観・慈悲観・数息観・因縁観・念仏観を指す。不淨観によって貪欲を止め、慈悲観によって瞋恚を止め、数息観によって散乱心を止め、因縁観によって愚癡を止め、念仏観によって種々の煩惱を止める。

63 『勝鬘經』に云わく、「三乗の初業は法に愚ならず」 『勝鬘經』顛倒真實章、「三乗初業、不愚於法」(T12, no. 353, p. 222, a29)を参照。

64 非想第九の無閻の金剛三昧 「非想第九」は、非想非非想処 = 第九の無礙道を指す。「金剛三昧」は、最後の煩惱を断じて、阿羅漢果を得るときに起こす禪定のこと。金剛喻定ともいう。

65 如実智 『大品般若經』卷第一、序品、「十一智、法智、比智、他心智、世智、苦智、集智、滅智、道智、尽智、無生智、如実智」(T08, no. 223, p. 219, a13-15)を参照。

ずるや。

答えて曰う。仏法は復た無量なりと雖も、必ず須らく其の正要を取るべし。諸もろの小乗の経論、大乘の経論に明かす所の乗の義成ずるが如きは、教門に悉く此の十意有ること分明なり。但だ縁に随いて散説し、一処に聚まらず。今、経論を採りて、十意を撰して、以て乗の義を成ずるは、一家の義学、坐禪の徒をして、仏法の大小乗の経論に明かす所の入道の正意を知らしめんと欲せんが為めなり。外国の外人、各おの一究竟道を説くに異なる。末代の時、師子の身内の虫の法師・禪師有りて、「莊老の教えは仏教と一種なり」と云う。若し此の解を作さば、此の十法を将て比並す可し。若し彼れは空を明かして、具さに此の意有りて分明に名義成就せば、是れ同じきを許す可し。若し此の十法無く、或いは名義は似同すれども、^{けんかく}研覈するに、横豎は通ぜず、事理は滞闕し、名字に闕有り、義を作すこと成ぜずば、豈に同じきことを得んや。今、『毘曇』・『成実』は是れ仏法の小乗の論なりと雖も、空を明かして道に入る。其の論の文を檢せば、即ち十意は宛然として名義は無闕にして、仏法を申通す。小乗の入道の意は、転た分明なり。況んや復た大乘の経論なる者をや。外人の経書に既に此の名義無きが故に、皆な仏法に同じと言う可からざるなり。

2.52 一心三智は但だ是れ一仏乗なり

第二に一心三智は但だ是れ一仏乗なるを明かすとは、若し因縁の三諦を觀ぜば、初心に即ち一心三智を得。仏の知見を開くを、仏性を見ると名づく。即ち大乘なり。此れは則ち復た三乗の別を開かず。故に此の經の觀衆生品に、舍利弗は天女に問うて云わく、「汝は、三乗に於いて為た何を志求するや。天女答えて言う、我れは為めに三乗を化す。人の瞻蔔林に入るに、唯だ瞻蔔のみを嗅ぎ、余香を嗅がざるが如し。此の室に入らば、唯だ大乘の功德

の香を^か聞き、声聞・^{530c}辟支仏の功德の香を楽しまざるなり」と。当に一心三⁶⁶智は即ち是れ円教にして、般若波羅蜜は即ち是れ大乘なるを知るべし。故に『大品經』会宗品に云わく、「般若波羅蜜は、即ち是れ摩訶衍なり。摩訶衍は、即ち是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜・摩訶衍は二無く別無し⁶⁸」と。今、一心三觀会して大乘を成ずるを明かすは、大は不可思議に名づけ、乗は能く運ぶを以て義と為す。一心三觀の境智は並びに是れ不思議の法なり。能く菩薩を運びて道場に至らしむるが故に、大乘と名づく。

これは須らく六即到約して円教の一仏乗を明かすべし。即ち是れ六種の大乗の義なり。

2.521 理即の大乘を明かす

一に理即の大乘を明かすとは、『涅槃經』に云わく、「一切衆生は皆な是れ大乘なり⁶⁹」と。

2.522 名字即の大乘を明かす

二に名字即の大乘とは、理を縁せば、即ち大乘の心を発するなり。

66 此の經の觀衆生品に、舍利弗は天女に問うて云わく……声聞・辟支仏の功德の香を楽しまざるなり」『維摩經』卷中、觀衆生品、「舍利弗問天、汝於三乘、為何志求。天曰、以声聞法化衆生故、我為声聞。以因緣法化衆生故、我為辟支仏。以大悲法化衆生故、我為大乘。舍利弗、如人入瞻蔔林、唯嗅瞻蔔、不嗅余香。如是、若入此室、但聞仏功德之香、不樂聞声聞、辟支仏功德香也」(T14, no. 475, p. 548, a22-27)を参照。

67 三 底本の「二」を文意と『三觀義』によって「三」に改める。『三觀義』卷下、「当知一心三智即是円教」(X55, no. 909, p. 676, c12)を参照。

68 『大品經』会宗品に云わく、「般若波羅蜜は、即ち是れ摩訶衍なり。摩訶衍は、即ち是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜・摩訶衍は二無く別無し」『大品般若經』卷第七、会宗品、「摩訶衍不異般若波羅蜜、般若波羅蜜不異摩訶衍。般若波羅蜜、摩訶衍無二無別」(T08, no. 223, p. 267, a8-10)を参照。

69 『涅槃經』に云わく、「一切衆生は皆な是れ大乘なり」『南本涅槃經』卷第二十三、光明遍照高貴徳王菩薩品、「菩薩了知一切衆生皆帰一道。一道者、謂大乘也」(T12, no. 375, p. 759, b15-16)を参照。

2.523 観行即の大乘を明かす

三に観行即の大乘とは、即ち是れ不思議の十法を修し、通達して無礙なり。十法の名は前に説くが如し。今略して不思議の十法もて観行即を成ずるを明かすとは、

2.5231 不思議の正因縁は即ち是れ所觀の境なるを知る

一に不思議の正因縁は即ち是れ所觀の境なるを知る。前に一念の眠心に一切の夢法を具するを明かし、一念の無明に一切法の三諦の理の不縦不横なるを具するを譬うるが如きは、即ち其の義なり。此れは須らく的しく維摩、弥勒を訶して、「一切衆生は即ち大涅槃、即ち菩提の相なり」と言うを取りて、此の不思議の因縁を明かすべきなり。所以は何ん。中道第一義諦は因縁に非ず、是れ無作の四諦の因縁なり。若し涅槃は即ち生死なりと言わば、一実諦は即ち是れ苦の因縁なり。若し生死は即ち涅槃なりと言わば、一実諦は即ち是れ滅の因縁なり。若し菩提は即ち煩惱なりと言わば、一実諦は即ち是れ集の因縁なり。若し煩惱は即ち菩提なりと言わば、一実諦は即ち是れ道の因縁なり。是れ不思議の世間・出世間の正因縁を知ると為すなり。

2.5232 真正の発心を明かす

二に次に真正の発心を明かすとは、即ち是れ無縁の慈悲、無作の四弘誓願なり。若し無縁の大慈もて生死は即ち涅槃、煩惱は即ち菩提なりと觀じ、衆生に此の滅・道の樂を与え、無縁の大慈と名づくるなり。涅槃は即ち生死、菩提は即ち煩惱なりと觀じ、衆生の此の虚妄の苦を抜かんと欲するを、無縁の大悲と名づくるなり。無作の四弘誓願とは、涅槃は即ち生死なりと知り、未だ苦諦を度せざるものをして、苦諦を度せしむるなり。菩提は即ち煩惱なりと知り、未だ集諦を解せざるものをして、集諦を解せしむるなり^{531a}。煩惱は即ち菩提なりと知り、未だ道諦に安んぜざるものをして、道諦に安んぜしむるなり。生死は即ち涅槃なりと知り、未だ涅槃を得ざるものをして、涅槃を得しむるなり。菩薩は是の如く慈悲・誓願・無縁・無念もて一切衆生を覆う

こと、猶お大雲の功用を加えざるが如く、磁石の鉄を吸うが如し。是れ真正の菩提心と名づくるなり。

2.5233 菩薩道を行じて止観を勤修するを明かす

三に菩薩道を行じて止観を勤修するを明かすとは、若し生死は即ち涅槃なりと知らば、即ち是れ善く止を修するなり。若し煩惱は即ち菩提なりと知らば、即ち是れ善く観を修するなり。陰陽調適して万物長成するが如し。若し巧みに止観を修せば、即ち能く一心に万行を具するなり。

問うて曰う。何を以て集と為すや。

答えて曰う。此の經、及び『涅槃經』に依るに、無明、愛の一切の煩惱を集諦と為す。業は苦に属す。今の対の義に於いて便と為すなり。

2.5234 諸法を破すこと遍きを明かす

四に諸法を破すこと遍きを明かすとは、若し生死は即ち涅槃なりと知らば、即ち分段・變易の二種の生死を破すこと皆な遍し。若し煩惱は即ち菩提なりと知らば、則ち一切の界内・界外の煩惱を破すこと遍きなり。譬えば轉輪聖王は能く一切の強敵を破し、亦た破する所有らざるが如し。般若波羅蜜も亦復た是の如く、能く一切法を破し、亦た破する所有らず。

2.5235 善く通塞を知る

五に善く通塞を知るとは。生死は即ち涅槃なり、煩惱は即ち菩提なりと知らば、則ち一切皆な通ず。涅槃は即ち生死なり、菩提は即ち煩惱なりと知らば、則ち一切皆な塞がるなり。

2.5236 善く道品を修す

六に善く道品を修すとは、十法界の五陰の生死は即ち是れ法性の五陰なり、

法性の五陰は即ち是れ性浄の涅槃なりと観ぜば、即ち是れ四念処もて八倒⁷⁰を破す。涅槃は即ち生死なりと知らば、四枯を顕わすなり。生死は即ち涅槃なりと知らば、四栄を顕わすなり。一実諦を知るは、是れ虚空仏性を見、大涅槃に住するなり。此の四念処に因りて、正勤・如意足・根・力・覚・道を修するは、即ち是れ道品なり。善知識は是れに由りて正覚を成ず。亦た是れ双樹を莊嚴す。是れ則ち煩惱は即ち菩提なり。

2.5237 対治して諸波羅蜜を修するを助く

七に対治して諸波羅蜜を修するを助くとは、菩提は即ち是れ重悪の煩惱なりと知る。是こを以て生死は即ち涅槃なりと知り、対治の諸波羅蜜あり⁷¹。「諸度法の等侶⁷²」は、煩惱即菩提の三解脱門を開くを助く。対治若し成ぜば、煩惱は即ち菩提なり。

2.5238 善く位次を識る

八に善く位次を識るとは、涅槃⁷³は即ち生死なり、菩提は即ち煩惱なり。此れは是れ理即なり。若し生死は即ち涅槃なり、煩惱は即ち菩提なりと知らば、是れ名字即と為す^{531b}。此の観行に因りて、分明に五品弟子を成ずるは、即ち是れ観行即なり。六根清浄を得るを、相似即と名づく。四十一地を成ずるは、即ち是れ分証真實即なり。妙覚果を証するは、即ち是れ究竟即なり。若し能善く此の次位を解せば、即ち大乘の増上慢、大乘の施陀羅の過罪を起こさざるなり。

70 八倒 無常・苦・無我・不浄である世間の法を常・楽・我・浄であるとする誤った四種の見解と、常・楽・我・浄である涅槃の法を無常・苦・無我・不浄であるとする誤った四種の見解を合わせて八倒という。

71 対治の諸波羅蜜あり 『四教義』卷第十一に、「是以知生死即涅槃、以起対治諸波羅蜜」(T46, no. 1929, p. 762, a25-26)とあり、意味が取りやすい。

72 「諸度法の等侶」 『維摩經』卷中、仏道品、「諸度法等侶 四摂為伎女 歌詠誦法言 以此為音樂」(T14, no. 475, p. 549, c8-9)を参照。

73 槃 底本の「般」を『再校維摩經玄義』には「槃」に作る。これに従う。

2.5239 安忍成就す

九に安忍成就すとは、若し生死は即ち涅槃なりと知らば、即ち陰界入境・病患境・業相境・魔事境・禪門境・二乗境・菩薩境の壊する所と為らざるなり。若し煩惱は即ち菩提なりと知らば、即ち煩惱境・諸見境・増上慢境の壊する所と為らず。能く此の無作の苦集を忍び、壊する所と為らざれば、此れは『大智論』に、「能く成道の事を忍び、動ぜず亦た退せざれば、是の心を薩埵と名づく」と説くが如きなり⁷⁴。

2.52310 順道の法愛生ぜず

十に順道の法愛生ぜずとは、生死は即ち涅槃なりと観ぜば、一切の諸禪定、三昧等の功德を生ず。煩惱は即ち菩提なりと観ぜば、諸陀羅尼門・四無所畏・十八不共法・四無閼智・一切種智を生ず。順道の法に於いて愛せず著せざるは、是れ観行乗と為す。

2.524 相似即の大乗を明かす

四に相似即の大乗を明かすとは、即ち是れ六根清浄を得ることなり。『法華經』に説くが如し⁷⁵。

2.525 分証真實即の大乗を明かす

五に分証真實即の大乗とは、即ち是れ初發心住、乃至、等覺なり。

2.526 究竟即の大乗を明かす

六に究竟即の大乗を明かすとは、即ち是れ妙覺地なり。『法華經』に、「仏

74 『大智論』に、「能く成道の事を忍び、動ぜず亦た退せざれば、是の心を薩埵と名づく」と説くが如きなり 『大智度論』卷第四、「一切諸仏法 智慧及戒定 能利益一切 是名為菩提 其心不可動 能忍成道事 不斷亦不破 是心名薩埵」(T25, no. 1509, p. 86, a17-20)を参照。

75 『法華經』に説くが如し 『法華經』法師功德品に六根清浄の功德を明らかにする。

は自ら大乘に住して、其の得る所の法の如きは、定慧の力もて莊嚴す」とあるが如きなり⁷⁶。故に『法華經』に云わく、「是の乗は三界の中従り出でて、薩婆若の中に到りて住す。是の乗は動ぜず出でず⁷⁷」と。故に理即の大乘は發菩提心従り、名字即・觀行即・相似即を成ず。即ち是の乗は三界従り出するなり。『法華經』に云わく、「此の宝乗に乗じて、四方に遊び、嬉戲快樂して、直ちに道場に至る⁷⁸」と。若し分証真實即を得ば、十住に住し、仏知見を開き、此の宝乗に乗りて、東方に遊ぶ。若し十行に住せば、即ち是れ仏知見を示し、此の宝乗に乗りて、南方に遊ぶ。若し十迴向に住せば、即ち是れ仏知見を悟り、是の宝乗に乗りて、西方に遊ぶ。若し十地・等覺に住せば、即ち是れ仏知見の道に入り、是の宝乗に乗りて、北方に遊ぶ。若し妙覺に住せば、即ち是れ是の宝乗に乗りて、直ちに道場に至る。「薩婆若の中に到りて住す」と名づく。理即の大乘は、性、虚空の如し。故に「是の乗は動ぜず出でず^{531c}」と云うなり。略して一心三觀もて一仏乗を成ずるを明かし竟わる。

2.6 断結に約して浄名の義を釈す

第六に断結に約して浄名の義を釈すとは、三觀もて浄名の義を成ず。略して三と為す。一に不思議の断結を明かし、二に浄名の義を成じ、三に法を撰す。

76 『法華經』に、「仏は自ら大乘に住して、其の得る所の法の如きは、定慧の力もて莊嚴す」とあるが如きなり 『法華經』方便品、「仏自住大乘 如其所得法 定慧力莊嚴 以此度衆生」(T09, no. 262, p. 8, a23-25)を参照。

77 『大品經』に云わく、「是の乗は三界の中従り出でて、薩婆若の中に到りて住す。是の乗は動ぜず出でず」 『大品般若經』卷第六、出到品、「是乗從三界中出、至薩婆若中住。以不二法故」(T08, no. 223, p. 259, c18-19)、同卷第七、無生品、「於世間中不動不出、是名世間檀那波羅蜜。……於世間中能動能出、是故名出世間檀那波羅蜜」(同前, p. 272, b18-29)を参照。

78 『法華經』に云わく、「此の宝乗に乗じて、四方に遊び、嬉戲快樂して、直ちに道場に至る」 『法華經』譬喻品、「乘此宝乗 直至道場」(T09, no. 262, p. 15, a13-14)、同、「諸子は時 歡喜踊躍 乘是宝車 遊於四方 嬉戲快樂 自在無礙」(同前, p. 14, c17-19)を参照。

2.61 不思議の断結を明かす

一に不思議の断結を明かすとは、若し三観は定んで三諦の惑を断じ、三諦の理を証し、智断の徳成就するを名づけて淨無垢称と為すと言わば、此れは拙度の相に同じ。此の經に明かす所のお不思議の断惑に非ざるなり。今明かさく、不思議の三観は、不思議の三諦の理を見、見思・塵沙・無明の惑を断ぜずして、三諦の理と相応す。一心三観の智は煩惱をさまたげず、煩惱は一心三観の智を障さえず。智は惑を断ぜずして、理諦と相応す。即ち是れ煩惱を断ぜずして涅槃に入る。故に此の經に云わく、「癡愛を断ぜず、明脱を起79こす」、「菩薩は是の解脱に住し、能く須弥を以て芥子に内れ、種種に示現するなり」と。

問うて曰う。何の意もて決して須らく煩惱を断ぜずして涅槃に入るは、是れ不思議解脱の相なるべけんや。

答えて曰う。須弥の芥子に入るは、小は大を障えず、大は小をさまたげず。故に不思議と云うのみ。今、煩惱結惑有りて、智慧涅槃を障えず、智慧涅槃は煩惱結惑をさまたげず。乃ち不可思議と名づく。若其し惑無く智有りて涅槃に入るを不思議と称せば、今即ち反りて難ず。亦た応に小無く大有りて不思議を論ずべきなり。

2.62 浄名の義を成ず

二に三観を用て毘摩羅詰栗致を淨無垢称と為す義を釈すとは、浄名居士の因縁もて生ずる所の心、三諦の理は、性として常に皎然たり。之れを目標けて淨と為す。三諦の惑障を断ぜずして、能く一心三観・三智の明脱を起こす。明脱は三惑の内に処すと雖も、三惑の染むる所と為らず。故に無垢と称す。一心三智は三諦の理に会す。大用は無方にして機かたにかた称かたいて化するが故に、名

79 此の經に云わく、「癡愛を断ぜず、明脱を起こす」 『維摩經』卷上、弟子品、「不滅癡愛、起於明脱」(T14, no. 475, p. 540, b24-25)を参照。

80 「菩薩は是の解脱に住し、能く須弥を以て芥子に内れ、種種に示現するなり」 『維摩經』卷中、不思議品、「若菩薩住是解脱者、以須弥之高広内芥子中無所増減、須弥山王本相如故、而四天王、忉利諸天不覺不知己之所入、唯応度者乃見須弥入芥子中、是名住不思議解脱法門」(T14, no. 475, p. 546, b25-29)を参照。

づけて称と為す。故に浄無垢称と云うなり。

2.63 法を撰す

三に三観は一切法を撰するを明かす。三観は既に一切法を撰すれば、浄無垢称も亦た一切法を撰するなり。言う所の一切法を撰すとは、略して七種の法を撰するを明かすなり。一に理を撰し、二に結業を撰し、三に依正の報を撰し、四に智を撰し、五に行を撰し、六に位を撰し、七に教を撰す。此の七法もて一切の仏法を撰し、罄きて收めざること無し。是の故に若し能善く^{532a}三観を解し、浄無垢の名に通達すれば、則ち一切の仏法を解し、滞悶無きなり。

2.7 此の経の文を通ず

第七に三観もて此の経の文を通ずとは、即ち三意と為す。一に室外⁸¹を積し、二に室内を積し、三に出室を積す。

2.71 室外を積す

一に室外を積す。三観は仏国の因果の義を成ず。已に明宗に説く所の如し。此れは是れ仏国品を積するなり。次に析・体の二種の入空は、以て方便品に諸の国王、長者を訶するを積す可きなり。体仮入空の第二観は、弟子品を積す。十弟子を訶するの意は、正しく此に在るなり。次に第三の中道第一義観は菩薩品に四大菩薩を訶するを積するなり。

2.72 室内を積す

二に入室の六品を明かす。問疾品に、浄名は空室にて疾を以て臥するが若きは、即ち中道第一義諦観と相応する種⁸²智の果もて常寂国に依りて、空室

81 室外 『維摩経』の十四品を、維摩詰の室に入る前（室外）、室内（入出）、室から出た後（出室）の三段に分ける。対応する品は、本文に出る。

82 種 底本の「修」を、文意と『三観義』によって「種」に改める。『三観義』巻中、「即表中道第一義諦観相応種智」（X55, no. 909, p. 683, b14）を参照。なお、「種」に、「種古作修」という校異がある。

の相を現ざるを表わすなり。有疾の菩薩を慰諭し、自ら其の心を調伏すとは、即ち是れ三觀を用て有疾の菩薩を慰諭す。有疾の菩薩は亦た三觀を用て、^{もつ}已て三諦の惑疾を調うるなり。

不思議解脱品は、即ち是れ第⁸³三觀の種⁸⁴智の果もて正道に住し、双べて二諦を照らし、種種に示現す。

次に觀衆生品を積すとは、即ち是れ正しく初觀を以て積するなり。

次に仏道品を積すとは、即ち是れ第二觀もて積するなり。

次に入不二法門を積すとは、即ち是れ第三觀を用て積するなり。

次に香積品を積すとは、還た第三觀の、双べて二諦を照らし、垢淨俱に遊ぶを用て積するなり。

問うて曰う。室内に既に正しく不思議の義を明かせば、何ぞ別相三觀に約して、以て諸品を通ずることを得んや。

答えて曰う。經文は一往、別相三觀に約して説くに似たれども、細かく意趣を尋ぬれば、悉く通じて一心の中道に入るなり。

2.73 出室を積す

三に出室なり。菩薩行品・見阿闍仏品は、即ち三觀を用て、通じて仏国の因果を積す。前の仏国の意に同じきなり。

次に法供養・属累の二品を積す。流通分は、是れ室内・室外の三觀の折伏抑訶の意を流通するのみ。

維摩經玄疏卷第二

83 第 底本の「等」を、文意と『三觀義』によって「第」に改める。『三觀義』巻中、「不思議解脱品、即是第三觀種智之果住於正道」(X55, no. 909, p. 683, b17-18)を参照。

84 種 底本の「修」を、文意と『三觀義』によって「種」に改める。前注 82 を参照。